

[課題演習抄録]

対話的な読書活動を取り入れた国語科学習指導の研究

河 東 幸 江

Sachie KAWATO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：読書活動，対話，尋ねる

1 研究の目的

読書教育の研究者である山元隆春が、読書活動がもたらすものとして取り上げた中から次の2点を挙げる。

- ・ 自分の内なる世界を「築く」とともに自分の内面に「気づく」こと(2015:11-12)
- ・ 知識や情報を得て対象の質を見極める力や、それらの情報を取捨選択する基準と判断力を養う行為(2015:12)

これらは、読書活動が自分の内面への照射と自分が生きる上での指針を得るという重要なものになると示している。そして、指針を得る上では、他者との交流が重要になる。なぜなら、他者との交流は、自分の特性や他者との共通性を知ったり、自己の考え方を進化させたりすることができるからである。

しかし、現在の子どもは読解力や対話の仕方といった読書指導に必要な基礎力が乏しい。そのため本研究では、読書指導の基礎を育成するために、対話を取り入れた指導を考えて具体化していく。

2 研究の計画

読書指導をする上で重要となる対話について先行研究を行い、子どもの状況に合う、対話を取り入れた読書指導を考え、実践し、分析する。

3 研究の内容

(1)先行研究

読書指導のための基礎を育成する上で対話を取り入れた理由を佐藤公治の論を根拠に述べていく。佐藤は他者との関わりにおいて、「他者と相互作用

することによって、個人が持っている知識は相互に吟味・検証する機会が生まれてくる」(1999:66)と述べている。また、佐藤は「他者との交流を通して新たな情報の所在を知り、改めて自己の認識を再検証・形成することにもつながっている」(1999:66)とも述べている。これらから対話は、他者と交流することで、それぞれの知識を吟味することができ、自己の再検証を可能にする。これは、山元が述べる自分の内面の深化(「築く」や「気づく」)を強化することにつながる。

そうした対話の具体は、長谷浩也らの論に見いだすことができる。長谷らは、「合意形成とその能力」について「1. 知る, 2. 整理する, 3. 考えつくす, 4. まとめる」の4段階を設定している。その中の「1. 知る」について長谷らは「質問によって、新たな観点が生まれ、内容がより深くなることの大切さ」(2015:88)を指摘し、対話で質問することの重要性を述べている。

以上の佐藤と長谷らの先行研究を基盤として、子どもに対話の段階を意識させるために具体的な提示をしたいと考えた。そのため、対話による「自分の考えを吟味・検証する」までの見通しを対話の仕方として整理したのが表1である。本研究では、この対話の仕方を元に実践を行っていく。

表1 対話の仕方

段階	具体的な手立て
①尋ねることに慣れる	見つけたことだけを話す。
②わかり合うために尋ねる	なぜそう考えるのかを尋ね合う。
③内容を共有する	お互いの意見を整理する。
④自分の考えを吟味・検証する	話し合った内容を用いて、自分の考えたことを再整理する。 相手から尋ねられて改めて気づいたことを捉える。

(2)『旅の絵本』での授業実践

①本実践の概略

本実践は、実習校で『旅の絵本』(安野光雅)を用いて小3を対象に2回行った。両実践は、自分の内面の深化をより強化するために、対話の仕方を学ばせることや自己と他者の見つけたことの違いに気づかせることを目的とした。それぞれの実践では、同一教材の異なる場面を用いている。活動内容は、『旅の絵本』の場面のどの部分に注目したのかを隣の子と対話し、対話に関する自己評価を行うというものである。実践1と2では、活動の内容の深まりに差を付けて行った。

②本実践での工夫

①で挙げた目的を達成するための工夫を両実践に共通するものとして次の四つを行った。一つ目は、本時の授業の流れを最初に子どもに示すことである〈工夫1〉。二つ目は、自分の見つけたことを明確にするために、対話の前に付箋に書き出す活動を取り入れたことである〈工夫2〉。三つ目は、対話を進めやすくするために尋ね方等の例示を黒板に示したことである〈工夫3〉。四つ目は、対話を意識づけるために対話に関する自己評価を取り入れたことである〈工夫4〉。〈工夫3, 4〉を行った理由として、実践学級の子どもは授業中、自己の意見発表はできるが、尋ねることに慣れない様子があったからである。

さらに、実践2では、実践1で課題となった、子どもが対話の段階の全体像を把握できるように、表1を子どもが理解しやすいように言い換えたものを掲示した〈工夫5〉。

③本実践の考察

『旅の絵本』の授業実践について対話に関する〈工夫2, 3, 4, 5〉を考察していく。まず、〈工夫2〉である。感想には、子どもが自分と相手の見つけたことを比べ、見つけたことが同じことや違うことに気づけていた。これは、自分の見つけたことを先にまとめたことにより、対話をする時に見つけたことのみを話すことで、ワーキングメモリの負荷が少なくなったからだと考えられる。このことから〈工夫2〉は効果があったと考える。

次に〈工夫3, 4〉である。子どもの自己評価の「尋ね合う」ことに関して「よくできた、できた」と答えた子どもが実践1, 2共に85%以上と高い評価になった。子どもの自己評価が高かった要因として、授業中の具体的な例示が子どもの対話への抵抗を少なくしたと考える。このことから〈工夫3, 4〉についても効果があったと考える。

最後に、〈工夫5〉である。実践2の感想におい

て、相手と自己の思ったことの違いを述べている子どもが約3分の1いた。このことは、対話の段階があったことにより、対話を行った時に自分の考えを深めることができたからだと考えられる。そのため、〈工夫5〉も効果があったと思われる。

こうした授業を行った際の児童の感想として、実践1では、ただ尋ねたり、言ったりする楽しさを述べている子どもが多く見られた。一方で、実践2では、相手と自分の違いを知る楽しさについて述べている子どもが多く見られた。このような感想に違いが表れたのは、〈工夫5〉により、子どもが対話の段階を知ったからだと考えられる。

④本実践の成果と課題

本実践の成果としては、〈工夫2, 3, 4〉によって、子どもが対話をしやすくなったことである。

課題は、まず、尋ねる数が多すぎて子どもの中で混乱が生じたことである。また、対話の間に尋ね方のポイントについて触れることができなかつたために、子どもに尋ね方というものを意識的に学ばせることができなかったことである。そのため、〈工夫3〉の効果を高めるために、対話の途中でポイントを説明する必要があったと考えられる。

4 成果と課題

今回の成果として、子どもの状況に合わせた対話を指導できる教材を構築したことが挙げられる。また、「尋ね合う」など子どもが対話することに慣れる機会ともすることができた。一方、課題は最終的なゴールである「自分の考えを吟味・検証する」までの全ての指導を構築することができなかったことである。また、対話以外の読解力といった基礎力に関する指導について考えることができなかったことである。

そこで今後は、対話の仕方の段階③, ④にあたる内容や読書指導に必要な基礎力を子どもが習得できるような授業を構築し、実践する必要がある。

主な引用・参考文献

- 安野光雅 1977 『旅の絵本』 福音館書店
 長谷浩也・村松賢一 2015 「合意を目指した話し合い教材に関する研究」 『環太平洋大学研究紀要』(9)
 環太平洋大学 81-91
 佐藤公治 1999 『対話の中の学びと成長』 金子書房
 山元隆春編 2015 『読書教育を学ぶ人のために』 世界思想社